北方民族の間に於ける巫に就いて

一

トルコ・ツングース、蒙古族などの間には今も巫卽ち我が國でいふ「みこ」「かむなぎ」「いちこ」などに相當するものがあつて他人の爲に吉凶を豫言したり、病氣を癒したり、死人を呼び出すなど種々奇怪なことを行つて、彼等の社會の信仰を博して居る。此の種類の信仰は、所謂薩滿教（シャマン）（Shamanism）と稱するものであつて、必ずしも北方民族の間に限られたるものではない、既に狩野博士[1]の說かれた如く現今支那の諸地方にも存することであり、朝鮮にも日本にも禁止せられながらなほ其の面影を殘し、アメリカインデアンの間にもやはり存在して居るとのことである。思ふに古來未開の社會には何れの國でもかゝる信仰は行はれたもので、その形式に於て多少の相違こそあれ、人智發達の階段の中では、必らず經過すべき一時期であつたに違ない。各國の言語には大概巫に相當する言葉が存して居る如く見うけるが、これは卽ち廣く各國に巫のあつたことを證明するものに外ならぬであらう。こゝには現今の北方民族の間に於る巫もしくは薩滿教のことを概轄して述べやうとするのではない、たゞその名稱について少しく研究を試み、それに關聯して遠い昔から彼等の間には巫のあつたこと、巫がその國家社會の上に持つた役目などについて略述して見ようと思ふ。